

イチジクの新樹形(オーバーラップ整枝)の紹介

当センターでは一文字整枝の主枝を高くすることで、イチジク「^{ます}栴井ドーフィン」の凍害回避が可能であることを明らかにした。しかし、高主枝では収穫作業の能率が悪いことから、この問題を解決するために、凍害回避に有効な新樹形「オーバーラップ整枝」を考案した。

内容

(1) はじめに

本県におけるイチジク産地では、ほとんどの地域で一文字整枝が導入されている。この樹形は、主枝を畝に沿って水平に伸ばすことで、結果枝が畝に沿って並んでいることが特徴である。このようなことから、一文字整枝は収穫作業性の高い樹形であるといえる。

しかし、この樹形は主枝が地表40～60cmにあることから、地表付近の低温に遭遇しやすく、凍害を受けやすいことが問題となっている。特に主枝上面は凍害を受けやすく、主幹付近の主枝の損傷が致命的となり主枝全体が枯死する場合もある。

一方、当センターでは高主枝により凍害を回避できること(ひょうごの農林水産技術No.183)を明らかにした。しかし高主枝では、結果枝が180cm以上と高いため、誘引がしづらく、収穫時の作業能率が悪い。

このようなことから作業性が優れ、凍害回避が

可能な樹形とするため、高主枝の主幹部を従来の高さで水平に倒した「オーバーラップ整枝法」を考案し、2014年7月に特許出願した(特願2014-147213号)(図、写真)。

(2) 新樹形により期待される効果

結果枝の誘引や収穫作業の能率向上以外に、新樹形により期待される効果は以下の通りである。

- 主幹部の上に主枝部が重なることで、下部の主幹部では放射冷却が抑えられるとともに、直射光が遮られるため、凍害や日焼けを起こしにくい。
- 主幹部が長くなることで、結果枝の伸びが抑制され、収穫時期が早くなる。

今後の方針

新規植栽園において実証試験に取り組む。

松浦 克彦(企画調整・経営支援部、
前農産園芸部)

(問い合わせ先 電話：0790-47-2424)

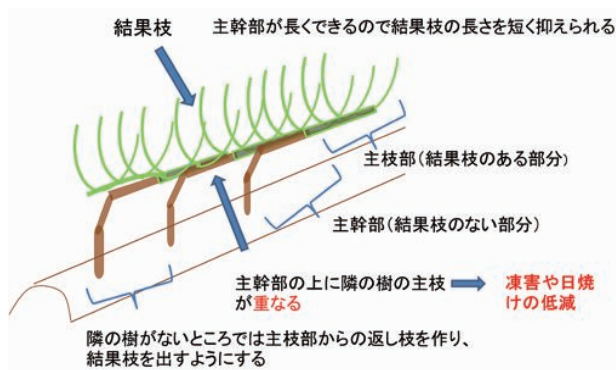


図 オーバーラップ整枝のイメージ図
(図中の茶色：主幹、緑：主枝、結果枝)



写真 オーバーラップ整枝の様子